

# 声のボランティア

## 桑の実

### 朗読ボランティアとは

皆さんは視覚に障害のある方や高齢者のために活躍する朗読ボランティアをご存知でしょうか？

朗読ボランティアは、物語りなどを施設で朗読することもありますが、自治体が発行する広報紙などを読み上げて音声ファイルやCDに録音し、必要とされる方々に提供するという活動も行っています。視力を失ったり、視力が著しく衰えたりした方にとって、こうした音訳図書が唯一の情報源となることも少なくありません。

市からの情報を受け取る手段として、最も市民に利用されているのは、毎月1日と15日に発行している「広報はむら」です。この「広報はむら」を視覚に障害のある方にも利用してもらおうと、30年以上にわたって

朗読ボランティアを続けている団体があります。それが「声のボランティア桑の実」です。



羽村に雪が降った12月9日の朝、「広報はむら」の音録現場を訪ねてみました。「おはようございます」「急に雪が降ってきたね」「急に雪が降ってきたね」「桑の実」の会員たちが一人、また一人と会議室に集まってくると、元気な声が

福祉センターの会議室に響きます。今日の収録のメンバーは「桑の実」会長の古溝さんたち3人と録音ボランティアの川上さん。ひとしきり身近な話題に花を咲かせると、「じゃあ、そろそろ原稿チェックを始めましょうか」。部屋の空気が一気に引き締まります。事前に配布された原稿を各自読み込む中で、疑問に思ったところを市の広報担当者に確認していきます。

「この項目は、逆に入れ替えて読んだほうがわかりやすいのでは...」この表現はなんかしつこくないわね」

視覚に障害のある方に正確に情報を伝えるため、聞き手の立場を考えながら原稿を整えていく様子は、日々の活動によって支えられた高い朗読技術の表れなのでしよう。

よりよいものをつくるためのアイデアは無尽蔵です。いかにわかりやすく伝えるか、熱心な調整が続きます。

### 結成から30年の歴史

「桑の実」の結成は昭和54年。公民館で開催された「声

のボランティア養成講座」の受講メンバーが中心となって発足し、翌年の1月から「声の広報」の発行が始まりました。以降30年以上にわたって「声の広報」の吹き込みをはじめ、市内施設への朗読訪問や朗読会の開催、朗読の勉強などを続けている、市内で最も歴史あるボランティア団体の一つです。現在では毎月2回、第一と第四の木曜日に勉強会をもち、会員19名で活動しています。「声の広報」は平成24年1月15日号で、通算587号を数えました。

### ふれあいを大切に

「桑の実」の皆さんには発足当時から大事にしていることがあるそうです。それは、ただ朗読するだけではなく、聞いている人たちと「ふれあう」こと。地域に根ざした活動としてずっと受け継がれてきた伝統です。また、朗読を通じて自分自身もレベルアップできると、仲間と一緒に何かに取り組めること、そうしたところも日頃の活動の励みになっているそうです。

もちろん朗読自体にも技術が求められるため、ボランティアの方々同士で勉強会を開催するなどして、常に向上を図るように努力されています。本などが好きで、朗読ボランティアに興味のある方はぜひ参加されてみてはいかがでしょうか。



原稿のチェックも終わり、いよいよ収録が始まります。古溝会長がマイクの向こうに語りかけます。「それでは、広報はむら12月15日号をご紹介しますしよー」